

# 男鹿市祓川Ⅰ遺跡出土の中世陶器

## －特に越前・珠洲系陶器について－

磯 村 亨

はじめに

「むかし中里とて坡に五、六も家のありたりしが、一とせ鮫漁に出て海あれて、舟くつがへりて死うせて村はろび、畑となりて今も陶など出るといふ。なかさとの名のみありきー下略ー」

これは、江戸時代後期の紀行家菅江真澄の『小鹿の鈴風』の一節である。中里（第1図3）は、男鹿市北浦湯本字中里に所在する中世の遺跡である。

「古屋敷には井戸の跡あり、或は瀬戸類土中より掘り出す事度々なりー下略ー」

これは、嘉永年間（1848～54）に鈴木重孝があらわした『絹飾』船越村の項の一節である。古屋敷は、男鹿市船越字一向の一向遺跡（同18）にあたると推定される。

日本海に突き出した男鹿半島は、男鹿市がその全域を占め、基部には若美町などが位置している。この地域では、上のように古くより陶磁器の出土が報じられている。

今回紹介する祓川Ⅰ遺跡（同1）は、男鹿市船川港門前字祓川に所在し、遺跡範囲内に長楽寺、またその近辺に五社堂、赤神神社といった宗教関係の建物や平安時代後期の作とされる仏像等の文化財が現存している。また、長楽寺の西側には、五社堂、本山（標高715.1m）、真山（標高567m）を通り北浦の真山神社に至る古くからの修行道がある。以上のことから、祓川Ⅰ遺跡は宗教関連の遺跡であると推察される。

本稿は、長楽寺西側の池を養魚場として整備する時（昭和32年）と長楽寺本堂裏の斜面が崩壊した時（昭和62・63年）に出土した陶磁器について紹介するものである。

### 1：男鹿半島の考古学的景観

ここでは、男鹿半島に所在する縄文、弥生、古代、中世の遺跡について第1図でその位置について概観し、中世城館跡の出土遺物の年代について取り上げてみたい。

縄文時代では脇本海岸遺跡（16）・椿中山遺跡（5）・若美町角間崎貝塚（12）・小浜沢遺跡（2）・大畑台遺跡（7）・延命寺台遺跡（11）・女川貝塚（6）、弥生時代では若美町横長根A遺跡（17）・志藤沢遺跡（13）、古代では脇本飯町遺跡（15）・小谷地遺跡（14）・三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡（8）等がある。

中世では、先述した遺跡の他に、祓川Ⅰ遺跡の東側に位置する双六館跡（4）、安東氏の居城として知られる脇本城跡（10）、脇本城の北西側、寒風山の南麓に築かれた茶臼館跡（9）等の城館跡がある。これらの館跡からは、双六館では14世紀後半の青磁碗、15世紀の青白磁碗・皿、脇本城跡では15・16世紀の青白磁碗・皿、16世紀の染付、茶臼館跡では15世紀の青白磁碗・皿・壺、15世紀半ばの瀬戸焼盤が、それぞれ出土している。



第1図 男鹿半島主要遺跡位置図

男鹿半島主要遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名      | 所在地          | 主な時代    | 番号 | 遺跡名   | 所在地            | 主な時代    |
|----|----------|--------------|---------|----|-------|----------------|---------|
| 1  | 祓川 I     | 船川港門前字祓川     | 中世・近世   | 10 | 脇本城   | 脇本字七沢          | 中世      |
| 2  | 小浜沢      | 北浦西黒沢字小浜沢    | 縄文前期・中世 | 11 | 延命寺台  | 脇本富永字延命寺台・毘沙門台 | 縄文後期・弥生 |
| 3  | 中里       | 北浦湯元字中里      | 中世      | 12 | 角間崎貝塚 | 若美町角間崎字岡見沢     | 縄文前期    |
| 4  | 双六館      | 船川港双六字館山     | 中世      | 13 | 志藤沢   | 若美町角間崎字志藤沢     | 弥生      |
| 5  | 中山 II    | 船川港椿字中山      | 縄文前期    | 14 | 小谷地   | 脇本富永字小谷地       | 古代      |
| 6  | 女川貝塚     | 船川港女川字堂ノ前    | 縄文後期・晩期 | 15 | 飯町    | 脇本字飯町          | 古代      |
| 7  | 大畑台      | 船川港南平沢字大畑台   | 縄文中期    | 16 | 脇本    | 脇本海岸           | 縄文早期    |
| 8  | 三十刈 I・II | 五里合箱井字三十刈    | 弥生・古代   | 17 | 横長根 A | 若美町弘戸字横長根      | 弥生      |
| 9  | 茶臼館      | 脇本田谷沢字住吉、要沢外 | 中世      | 18 | 一向    | 船越字一向          | 中世      |

## 2：出土遺物

祓川 I 遺跡から出土した遺物の大部分は、中世から現代にかけての陶磁器類である。このうちの越前焼と珠洲系陶器について取り上げて紹介していきたい。

陶器の部位名称は、「口縁部」、「胴部」、「底部」を用い、必要に応じて「端部」、「口唇部」、「肩部」を使用した。器種については、甕、壺、摺鉢とし、甕のうち大型のものを大甕とした。

また、器内外面および胎土の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』（1989年版）によった。

#### 越前焼（第2図・図版1）

##### 大甕（1～4）

##### 資料1（現存高25cm）

口縁部から胴部にかけての破片であり、胴部中位で最大径を測る。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は上下端に引き出されている。器面には、格子目と「上」が組合わさったタテ2.8cm×ヨコ5.3cmを測る大形の押印が見られ、押印施文後沈線が横方向に2本引かれている。胎土は緻密で、径3mm前後の白色礫が含まれている。色調は、外面が赤褐色、内面が暗赤褐色、胎土が灰褐色を呈している。

##### 資料2（現存高12cm）

口縁部の破片である。器面に刻線文が施されているが、断片的なものであり全体像は判然としない。

##### 資料3（現存高6cm）

口縁部の破片である。胴部は資料1と同じ形状であると推定されるが、1よりもやや上位で最大径を測ると思われる。口縁部はゆるやかに内傾しながら立ち上がる。口唇部は丸く作られており、凹線が巡っている。胎土は緻密である。色調は、外面が明赤褐色、内面が赤褐色、胎土が灰褐色を呈している。

##### 資料4（現存高12.5cm）

資料1・2と同一個体で、胴下半部から中位にかけての破片である。底部から胴部中位まで外傾しながら立ち上がる。器面には、格子目の押印（1とは原体が異なる）が不規則に施されている。

#### 壺（5）

##### 資料5（現存高10cm）

口縁部から胴部にかけての破片で、肩部に耳が欠落した痕跡が残っていることから有耳壺であることがわかる。内外面にはロクロ調整痕が認められる。胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外傾しながら直に立ち上がる。外面は所々剥落し粘土素地が露出し、内面には付着物が見られる。胎土は緻密である。色調は、外面が暗赤褐色、内面が暗褐色、胎土が灰褐色を呈している。

#### 珠洲系陶器（第3・4図・図版2・3）

##### 大甕・甕・壺（6～12）

口縁部はロクロ水挽き調整痕、胴部は平行タタキ目痕、胴部内面にはアテ具痕あるいはナデ調整痕が見られる。

##### 資料6（現存高10cm、推定口径47.5cm）

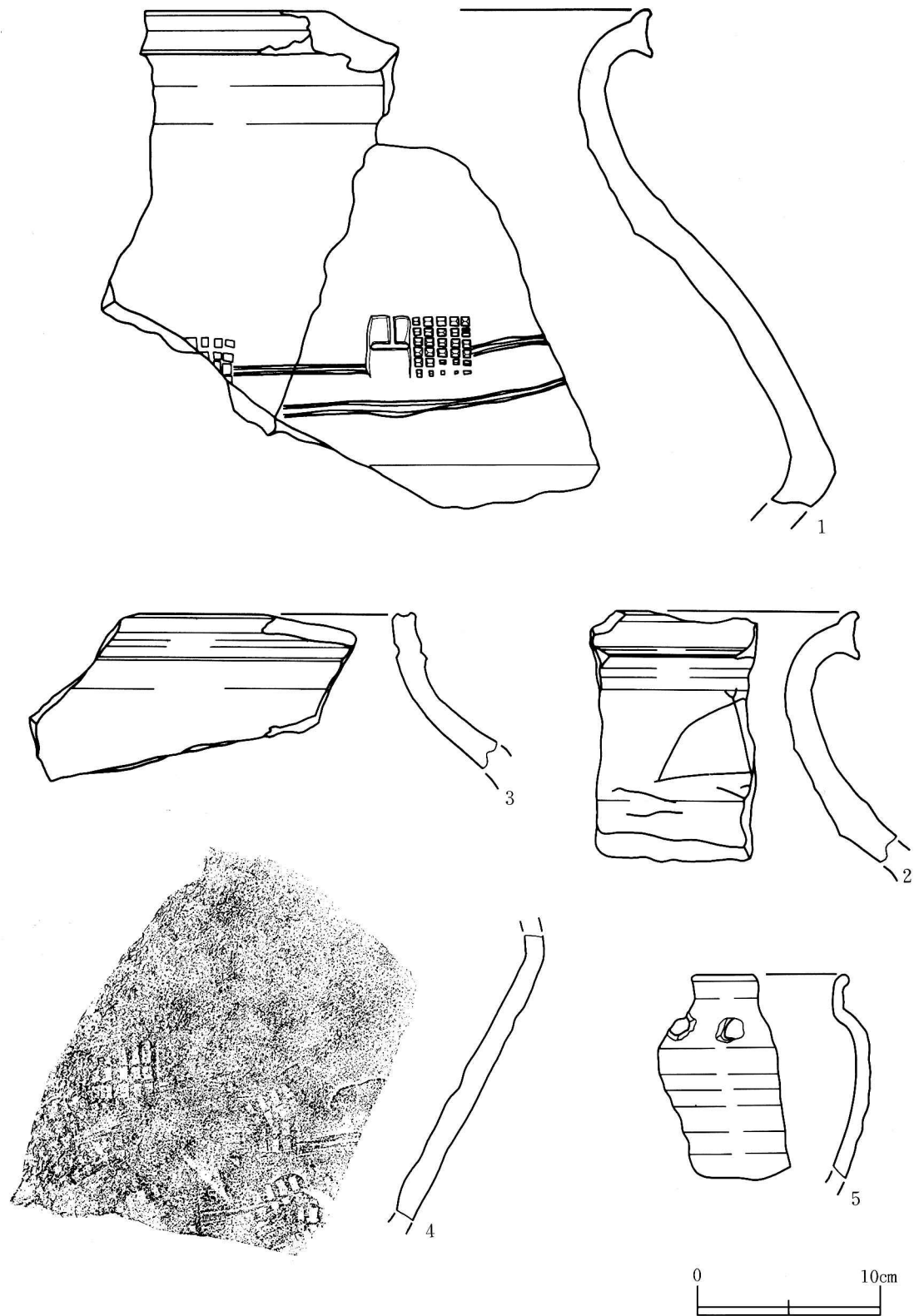
口縁部から肩部にかけての破片である。肩部が大きく張り出した器形で、口縁部は水平に折り返されている。胎土は粗く、器面には気泡状の小孔が多数見られる。色調は、内外面・胎土ともに灰色～灰褐色を呈している。

##### 資料7（現存高5cm）

口縁部の破片である。肩部から直立し、端部で外側に折り返され、口唇部は嘴状に引き出されている。表面には、内外面ともにロクロ調整痕が線状痕として残っている。また、内面には肩部と口縁部の境目に粘土紐積み上げ痕が明瞭に認められる。胎土は緻密である。色調は、内外面が灰色、胎土が灰褐色を呈している。

##### 資料8（現存高8.5cm）

口縁部から胴部上半にかけての破片である。胴部は内傾しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部は直立



第2図 越前焼

気味に立ち上がり、端部で外側に折り返され、口唇部は資料7よりも短いが嘴状に引き出されている。胎土は緻密である。色調は、内外面が暗褐色～灰褐色、胎土が灰褐色を呈している。

資料9（現存高12cm）

口縁部から胴部上半にかけての破片である。胴部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部で大きく外側に向かって折り返されている。口唇部は丸みを帯び、面取りがなされている。胎土は緻密である。色調は、外面が灰褐色、内面が灰色、胎土が灰褐色を呈している。

資料10（現存高 4 cm）

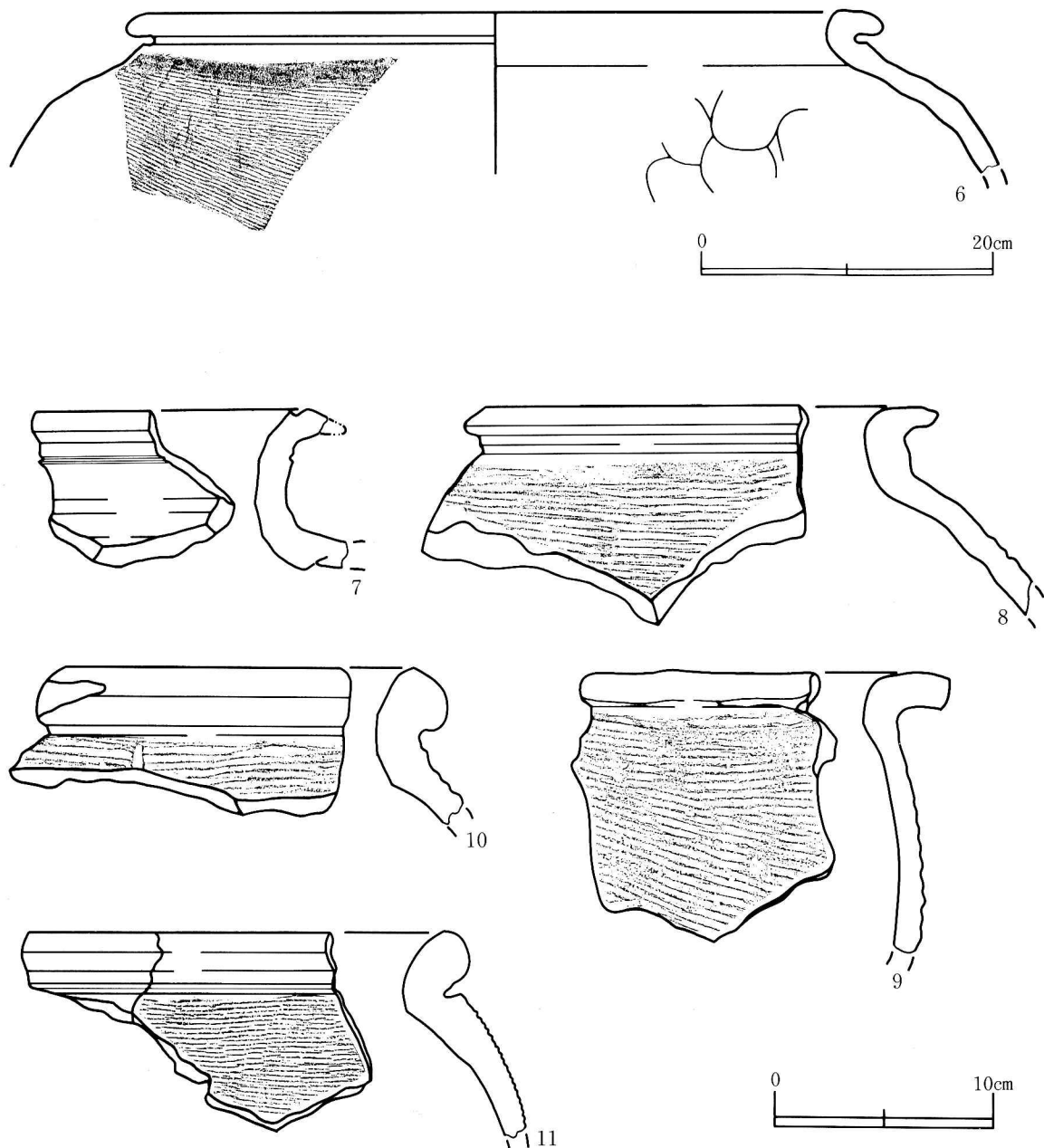
口縁部付近の破片である。口縁部は外側に折り返され、端部は外面に膨らみをもたせ、玉縁に作られている。肩部には、「|」状の刻文が見られる。胎土は緻密である。色調は、外面が灰色、内面が灰褐色、胎土が灰褐色を呈している。

資料11（現存高 7 cm）

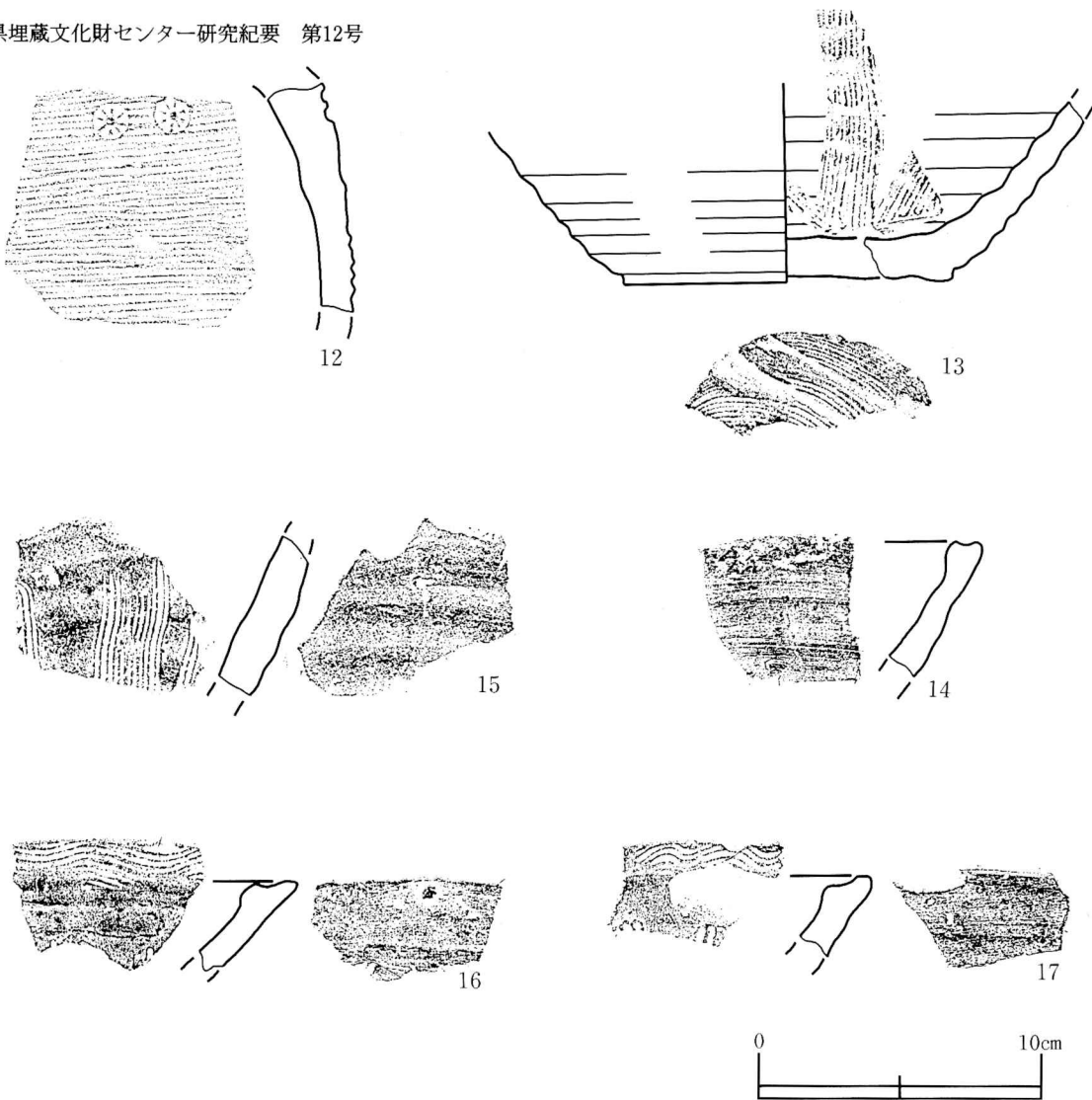
口縁部から胴部上半にかけての破片である。胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外側に折り返されている。胎土は粗く、器面に気泡状の小孔が多数見られる。色調は、内外面が灰色～灰褐色、胎土が灰褐色を呈している。

資料12（現存高 7 cm）

胴部の破片である。外面にはロクロ回転を利用したものと考えられる木口による調整痕が見られる。調整



第3図 珠洲系陶器(1)



第4図 珠洲系陶器(2)

後、先端部を加工した丸い棒状工具によるものと考えられる菊花状の押印が2つ並列して施されている。胎土は粗く、器面に気泡状の小孔が多数見られる。色調は、内外面が暗褐色、胎土が灰褐色を呈している。

摺鉢 (13～17)

内外面にロクロ水挽き調整痕が見られる。

資料13 (現存高 6 cm)

胴部下半から底部にかけての破片で、底面には回転糸切り痕が見られる。底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がっている。内外面ともにロクロ目が明瞭に見られる。内面には一条の幅が2 cmの卸し目が引かれ、使用によってかなり磨り減っている。胎土は緻密である。色調は、内外面・胎土ともに灰褐色を呈している。

資料14 (現存高 4 cm)

口縁部の破片である。ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口唇部は丸く作られており、凹線が巡っている。胎土は緻密である。色調は、内外面が褐色、胎土が灰褐色を呈している。

資料15 (現存高 5 cm)

胴部の破片である。内面には、一条の幅が3 cmの卸し目が引かれている。胎土は粗い。色調は、内外面ともに灰褐色、胎土が灰褐色を呈している。

資料16 (現存高 2.5 cm)

口縁部の破片である。口唇部が斜めに面取りされており、そこに櫛目波状文が施されている。胎土は緻密

である。色調は、外面が暗褐色、内面が暗灰色、胎土が灰褐色を呈している。

資料17（現存高3cm）

口縁部の破片である。器面の特徴は資料16とほぼ同様である。

紹介資料をそれぞれの陶器の編年表に当てはめると、1・2・4は14世紀初頭、3は15世紀後半、7・8が12世紀代、16・17が15世紀後半代と推定される。

おわりに

本稿は、祓川Ⅰ遺跡から出土した遺物のうち、ごく僅かな資料の紹介を行ったものである。遺跡の年代や器種構成についてまで解明できなかったのは、筆者の準備不足によるところが大きい。本稿を足掛かりにして、今後出土した遺物の整理・分析を進めたいと思う。

末筆になりましたが、陶磁器の年代については、珠洲系陶器は国立歴史民俗博物館の吉岡康暢教授、越前焼は福井県立陶芸館の田中照久氏にご教示いただきました。心から感謝いたします。

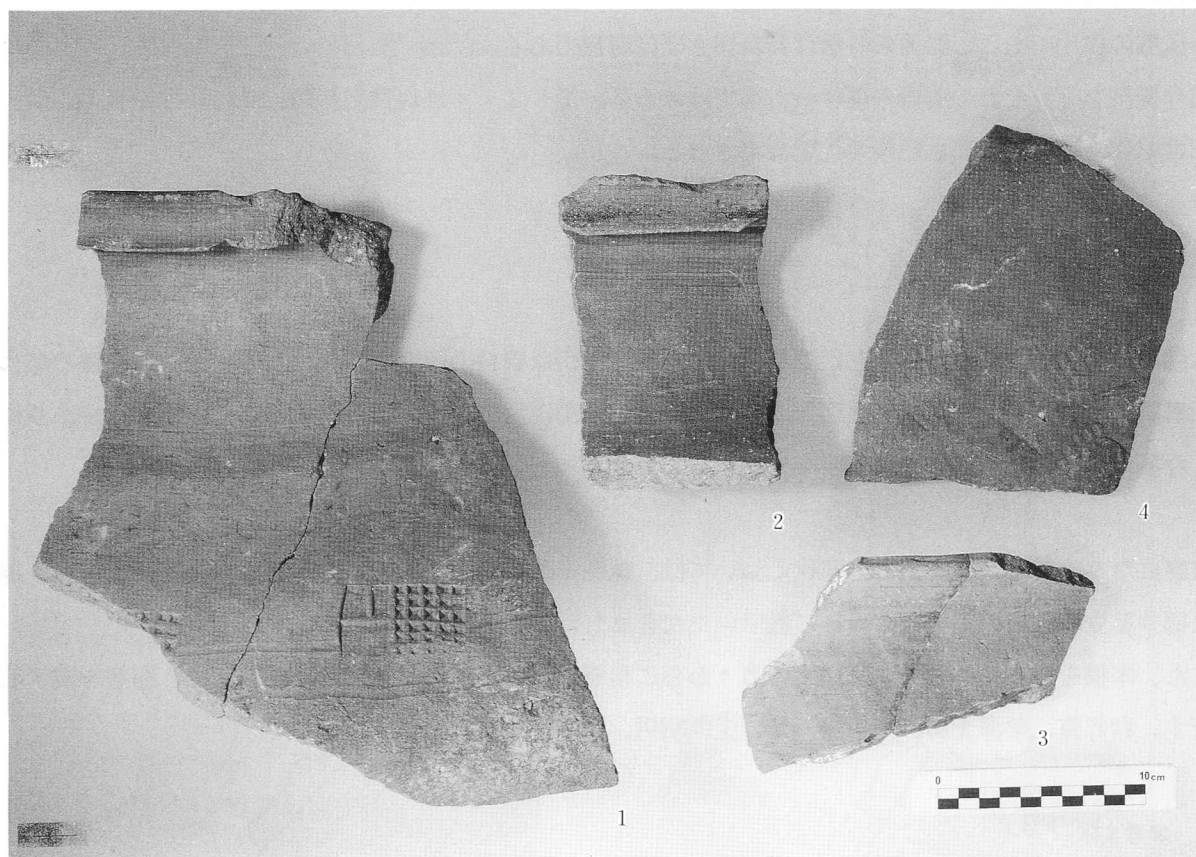
また、本稿を作成するにあたり以下の方々からご指導、ご助言いただきました。記して、謝意を表する次第です。利部修、栗澤光男、柴田陽一郎、庄内昭男、高橋学（敬称略）

#### 引用・参考文献

- 1：内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第4巻 1973(昭和48)年
- 2：深沢多市編『秋田叢書』第2巻 1929(昭和4)年
- 3：秋田県教育委員会『秋田県の文化財』 1989(平成元)年
- 4：磯村朝次郎編『船越誌』 1988(昭和63)年
- 5：佐藤初太郎「男鹿半島角間崎の石器時代遺跡」『東京人類学会雑誌』第139号 1897(明治30)年
- 6：秋田県教育委員会『小浜沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第100集 1983(昭和58)年
- 7：日本鉱業株式会社船川製油所『大畑台遺跡発掘調査報告書』 1979(昭和54)年
- 8：男鹿市教育委員会『延命寺台遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和59)年
- 9：磯村朝次郎・渡部晟「女川貝塚出土の遺物について」『秋田県立博物館研究報告』第4号 1979(昭和54)年
- 10：若美町教育委員会『横長根A遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和59)年
- 11：奥山潤「志藤沢(続縄文)遺跡」『秋田考古学』第1号 秋田考古学協会 1955(昭和30)年
- 12：秋田県教育委員会『脇本埋没家屋第一次調査概報』秋田県文化財調査報告書第5集 1965(昭和40)年  
秋田県教育委員会『脇本埋没家屋第二次調査概報』秋田県文化財調査報告書第6集 1966(昭和41)年  
秋田県教育委員会『脇本埋没家屋第三次調査概報』秋田県文化財調査報告書第11集 1967(昭和42)年
- 13：秋田県教育委員会『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第110集 1984(昭和59)年
- 14：狩野徳蔵『雄鹿名勝誌』五版 1914(大正3)年
- 15：男鹿市教育委員会『脇本石館遺跡・脇本城跡遺跡詳細分布調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第12集 1995(平成7)年
- 16：男鹿市『男鹿市史(上巻)』 1995(平成7)年
- 17：吉岡康暢『中世須恵器の研究』吉川弘文館 1994(平成6)年

(写真中の番号は挿図中の番号に対応します)

図版  
1



越 前 焼 -表-



越 前 焼 -裏-



珠洲系陶器(1) ー表ー



珠洲系陶器(1) ー裏ー



珠洲系陶器(2) -表-



珠洲系陶器(2) -裏-